

「中国仏教会復会六十週年学術研討会」参加記

坂井田夕起子

キーワード：中国仏教会・台湾仏教・“女性化仏教”・デジタル化・兩岸仏教交流

I はじめに

2007年7月7日、8日の2日間、台北にて中国仏教会復会六十週年学術研討会が開催された。この国際シンポジウムは、台湾の中国仏教会の復会60周年を記念したものである。

中国仏教会とは、中華民国の仏教統括組織である。1911年、北京において創設された中国仏教總會を起源とし、1928年に中国仏教協會と改編。現在に至る中国仏教会の名は、1929年に上海で開催された各省代表大会以来のものとなる。抗日戦争によって同会の活動は中断するが、1947年、南京の毘盧寺において復会第一回全国會員代表大会を開催した。そこから数えて2007年は記念すべき60周年（「一甲子」）なのである。

1949年以降、多くの高僧や居士が国民政府と共に台湾へ渡り、中国仏教会も活動の場を台湾へ移した。そして、台湾における唯一の「仏教的行政機構」として、植民地時代の日本仏教色の排除を目指し、大陸出身の僧侶による主導で、台湾における「中国仏教」の「近代化」を推し進め、冷戦時期には東南アジアの華僧を中心に「反共」的会議を組織するなどの経験ももつ。

しかしながら、1987年の戒嚴令解除以降、台湾において複数の仏教団体が認可されるようになると、仏光山¹⁾や法鼓山²⁾、慈濟功德会³⁾、中台禪山など、中国仏教会に帰属しない仏教団体が台湾の人々を多数取り込み、海外へ向けても大きく発展していった。中国仏教会も中国大陸との関係では「探親」を契機とした交流が始まり、また組織内でも台湾出身の淨心理事長が誕生する変化を迎えた。と同時に、台湾仏教界におけるかつての統制力は急速に衰えた。そのような状況の中、現理事長の淨良長老はかつて唯一の「仏教行政機構」だった時代の功罪と現状を鑑み、さらに60周年という大きな節目にあたり、中国仏教会の49年以降の档案公開を決意したそうである。

1) 高雄に拠点を持つ。星雲法師が指導。信者は100万人を自称。

2) 台北に拠点を持つ。聖嚴法師が指導。信者は40万人を自称。

3) 花蓮に拠点を持つ台湾で最も著名な集団。会員は台湾に200万、海外に400万を自称。

その際、中国仏教会には学术界に明るい人物がいなかったので、仏教界と学术界の双方を知る闕正宗氏に白羽の矢がたった。闕氏は当時、成功大学大学院の博士課程に在籍していたが、仏教徒として長年仏教新聞を編集し、仏教関連書物を数多く執筆していた⁴⁾。浄良長老に企画書の提示を求められ、闕氏は国際学術シンポジウムの開催と档案のデジタル化を提言し、それが今回のシンポジウムに繋がったというわけである。

筆者は台湾で史料調査をした際に闕氏を訪ねたことが「仏縁」となり、今回のシンポジウムに声をかけていただいた。半年前に闕氏から提示されたテーマは「戦後台湾仏教の発展に関するもの」であり、筆者は当時の関心に沿って、1950年代の日台仏教者たちの交流再開と玄奘三蔵の遺骨をめぐる日・中・台湾の相克についてまとめ、シンポ開催2ヶ月前に提出した。冷戦時期の中台関係の微妙な時期についての報告なので若干心配していたが、事務局サイドはノーチェックであった。後日受け取ったプログラムで各報告のタイトルを見ると、戦前・戦後を通じた中国仏教会と台湾仏教に関するテーマが並んでおり、シンポジウムにふさわしい内容が整っていた。内訳は、台湾から9本、中国から6本の報告があり、日本人は筆者のほか、台湾の立德管理学院で教鞭をとる野川氏が報告をした。

2日間のシンポジウムのプログラムは以下の通り。各報告は25分。ごく大まかにまとめると、中国の研究者が49年以前の中国仏教会について、台湾の研究者が49年以後について報告し、日本人の野川氏が45年以前の台湾仏教について、筆者が45年以後の台湾仏教について報告したといえようか。場ごとにフロアからの質疑応答があり、活発な議論が展開された。紙幅の関係で各報告に言及することができないため興味をもたれた方は、最近出版された『中国仏教会復会六十週年学術研討会論文集』⁵⁾をご参照いただきたい。

II シンポジウム概要

開幕セレモニーでは、会場である青少年育楽中心の壇上の大きなスクリーンに仏像を映し、そこに各県仏教会理事長たちが献花して始まった。仏宝歌を歌い、浄良理事長と各長老の挨拶があり、内政部の李逸洋部長や江燦騰教授の祝辞などが続いた。

シンポジウムでは報告者たちの多くが壇上から「阿弥陀仏」と会場に挨拶し、会場からも「阿弥陀仏」の返答がある和やかな雰囲気の中で2日間のシンポジウムが行われた。学術的でありながら、あくまで中国仏教会の活動の延長にシンポジウムがあった。

4) 闕氏の修士論文は『重読台湾仏教 戦後台湾仏教』（正編・続編、大千出版社、2004年）として出版されている他、『台湾仏教一百年』（東大図書公司、1999年）、『台湾仏教的信仰与文化』（博揚文化、2004年）等の著書が多数ある。

5) 論文集の奥付は2007年8月となっているが、実際に出版されたのは2008年4月である。

第1日：2007年7月7日（土）

9:00 - 9:50 開幕セレモニーと理事長・主賓の挨拶 記念撮影

■第1場 司会：從慈法師（南投県仏教会理事長） 10:30 - 12:00

顔尚文（中正大学）

「中国仏教会建立の基盤——戦後中国仏教会の整理と第一届全国会員代表大会」

卓遵宏（国史館）・印彬（華嚴専宗研究所修士生）

「中国仏教会遷台の前前後後——兼論南亭法師秘書長任内の発展」

李玉珍（精華大学）「中国仏教会一甲子女戒師」

■第2場 司会：円宗長老（中国仏教会副理事長） 13:30 - 15:30

王荣国（厦門大学）「鼓山湧泉寺仏教及其对台湾仏教影響略論」

李世偉（花蓮教育大学民間文学研究所）「感応、神異与弘法——戦後中仏会の仏教宣揚」

陳進国（北京社会科学院宗教所）「自我与他者：人生（間）仏教思潮与台湾仏教革新運動」

■第3場 司会：藍吉富（中国仏教研究所）

坂井田夕起子（大阪教育大学）

「戦後日本の玄奘三蔵遺骨「返還」問題——日台仏教交流再出発之考察」

野川博之（立德管理学院）「善導寺寺名考初探——以中仏会進駐以前为中心」

（歓迎晚会：珍膳圓会館）

第2日：2007年7月8日（日）

■第4場 司会：心茂法師（高雄県仏教会理事長） 9:00 - 10:00

林国平（福建師範大学）「鼓山禪」理論及其在禪宗史上的地位」

陳省身（輔仁大学宗教所修士）「台湾瑜伽噉口施食演法变化与戦後中仏会遷台の關係」

■第5場 司会：今能長老（中国仏教会常務理事） 10:20 - 12:00

何建明（中国人民大学教授）

「中国現代仏教史上的激進与保守——以1931年第三次全国仏教徒代表大会为中心」

侯坤宏（国史館）「戦後台湾仏教の「護法運動」

王見川（南台科大）「《火烧紅蓮寺》電影、小説の流行与「中国仏教会」の護教」

■第6場 司会：見引法師（屏東県仏教会理事長）

何綿山（福建広電大学）「解嚴後兩岸仏教交流評述」

黄夏年（中国社会科学院世界宗教研究所）

「關於中国仏教会研究の史料討論——以1911至1949年為例」

■第7場 司会：陳玉女（成功大学）

黄運喜（玄奘大学）「中仏会与玄奘大学」

闕正宗（菩提長青雜誌）「戦後中仏会对日僧寺産の交渉与争取」

■第8場 司会：浄良長老（中国仏教会理事長） 16:30 - 18:00

座談会：藍吉富、何綿山、黄夏年、顔尚文、卓遵宏、何建明

18:10 - 18:30 閉幕セレモニー（閉幕晩会：長春素食）

■エクスカージョン

3日目：2007年7月9日（月）

午前：基隆 月眉山靈泉禪寺訪問・座談会

午後：五股觀音山凌雲禪寺訪問・座談会

夕方：中国仏教会（台北善導寺）訪問・浄良長老による晩会（鈺善閣）

4日目：2007年7月10日（火）

南投県日月潭玄奘寺訪問・午餐・座談会 台北市内で晩会（頤園素食小館）

Ⅲ シンポジウムとその周辺

1) デジタル化

シンポジウム前日、日本から参加した筆者と北京や福建から到着した黄夏年教授ほか大陸の参加者、そして台湾在住の野川氏ら10名ほどがシンポジウム期間の宿舎となっている圓山大飯店に集まり、挨拶と自己紹介などを兼ねて夕食をとった。この席で参加者全員に黄夏年教授から『民国仏教期刊文献集成』（2006、北京）の総目録CD-ROMが配られた。『民国仏教期刊文献集成』とは1949年以前の中民国時期の仏教雑誌で現存するものを全て複写し刊行したもので、209冊を数える（2008年には補編として86冊が刊行された）。これら膨大な史料の詳細な総目録に加え、さらに戦後の中国仏教協会の機関紙『現代仏学』（1950 - 64年）の目次も加わったものがたった1枚のCD-ROMにまとめられて無料配布されているという事実に驚き、その便利さに感動した。台湾や中国では仏教経典のほとんどがデジタル化され、太虚法師などの高僧の全集もCD-ROMになっている。今回訪問した台湾のどの寺院でも住職の説法CDが“免費結縁”で入り口におかれていた。さらに中正大学では仏寺データのデジタル化を進め、2年以内に全台湾仏寺の地理位置をGPSによって見ることができるようになる計画があるという。兩岸仏教界のデジタル化の勢いはすさまじい。

シンポジウム終了後、中国仏教会の档案整理も順調に進んでおり、まず2008年末に歴代の会議記録が編集を終え、年表なども付けて2009年に出版されるそうである。

2) “女性化仏教”

シンポジウム1日目、参加者はホテルからバスで会場の青少年育楽中心（仁愛路1段17号）へむかった。この建物は戦前は日本曹洞宗のもので、老朽化によって現在は建て替えられている。青少年育楽中心の周囲には、現在鐘楼と「東和禪寺」の石碑が残され、裏にある小さなお堂は台湾の寺院として使われていた。青少年育楽中心の入り口には五色の仏旗がいくつも飾られ、建物の中にはいると紫色の制服をきた女性たちが一列に並んで

「阿弥陀仏」と手を合わせて迎えてくれた。シンポジウムは中国仏教会主催であるが、会場その他の運営補助スタッフなどには他の仏教団体に属する信者たちのボランティアが多くみられた。

シンポジウム会場は300人ほどが収容可能な6階の国際会議庁であった。主催者側の話では、300人の半分を一般参加者、半分を研究従事者と想定したとのことで、中国仏教会のウェブサイトでも参加募集をしていた。研究者と一般双方が参加する形式の学術シンポジウムは台湾では一般的なものだという。「参加者は7割くらいが尼僧じゃないですかね、壮観ですよ」と鬨正宗氏の言葉通り、会場を埋める僧衣のかなりを尼僧たちが占めた。

台湾の仏教は欧米で“女性化仏教”と呼ばれているほど女性たちの活躍が目覚ましい。統計によると僧侶の男女比は1:5だそうである。なにしろ台湾仏教の世界では実力があれば尼僧でも住職になれ、専用の養老院があるので老後の心配もいらない。大きな仏教組織は仏教活動の延長として慈善事業や生涯学習的なサークルなどの部局のほか、出版事業もTV局も持っており、海外にも多くの拠点を持つ。そこでも活躍するのは実力ある尼僧たちなのだそう。台湾の学歴社会を反映して、仏教界でも高学歴の人が出家すれば僧位が高いところからスタートでき、日本のように入門して最下層から修行する必要がない。だから高学歴の女性の出家も多いらしい。筆者が「台湾の尼僧さんたち、すごいですね」と水を向けるたびに、男性たちがみな「問題があります」と渋い顔。なかには「僕たちの努力が足らずにすみません」と殊勝に答える台湾人男性もいた（そういう問題ばかりでもないと思うが）。筆者の台湾人の友人も、史料調査で会うたびにになにかと筆者の仏教への関心を心配する。彼の親戚にも仏教系の社会活動にのめり込む女性が多いのだそう。

実際、中国仏教会でも、いつも浄良長老の傍らにいてテキパキ指示を出しているのは尼僧の堅如法師である。彼女の名刺の肩書きは中国仏教会網路執行長・台北市仏教会理事・台北県仏教会理事・弥陀文教基金会執行長などである。“仏教会網路執行長”とはどのような仕事か質問すると彼女は「インターネット」と答えたが、別の女性が横から「CEO!」と筆者にささやいた。なるほど、比喩半分としてもわかりやすい。シンポジウムで司会を務めた屏東県仏教会理事長も尼僧さんであったし、エクスカージョンで訪問した五股観音山凌雲禪寺も住職が尼僧さんであった。

休憩時間には多くの尼僧さんに声をかけられた。とくに印象に残っているのは大学進学と同時に出家した学僧さんと、日本人と結婚していたけれど最近出家したという尼僧さんである。女性の出家のタイミングで多いのは大学進学時期（各仏教組織には奨学金等があるという）と子供が独立した後だそうで、前者の若い学僧さんは、職業選択の1つに出家があるような感じで、家族は全く心配していないと言った。夏休みにはアメリカで説法などの活動をするのだという。後者の年輩の尼僧さんは「私は妻として母として家庭で充分務めを果たした。姑を看取った今は自分の時間を自分のために使いたい。私は社会のためになることがしたい」のだそう。台湾の仏教団体では慈善事業が盛んであり、海外ボラン

ティアも積極的である。国際的にも著名な慈濟功德会では、リーダーの釈証巖(尼僧)が「総統選挙に立候補すれば当選確実」との冗談が冗談にならないほどのカリスマがあるという。証巖法師は1992年に台湾でノーベル平和賞の候補に推薦されている。

ほかにも若い尼僧たちがおもしろがって筆者にいろんな学僧を紹介してくれたが、中には海外からの留学生も何人かいた。彼女らもまた多くが尼僧である。東南アジアのテラワダ仏教(いわゆる「小乗仏教」)では女性が出家できないため、台湾で出家し勉強しているのだそう。台湾には宗教者専用のビザがあり、多くの学僧が来台しているという。シンポジウム会場で年齢も国籍も違う多くの剃髪女性たちが、同じ僧衣で一堂に会してさえずっている様子は雰囲気の良い女子校のようであった。

3) 兩岸仏教交流

シンポジウムでは、大陸と台湾の研究者たちの学術交流は非常に活発に行われていることがわかった。特に福建の学者たちは頻繁に台湾を訪れて調査・研究活動をしており、近年は兩岸合同の学術研究会も行われているという(第6場の何綿山報告を参照)。かつて藍吉富教授から酒飲み話で伺った「戒嚴令の時代の台湾は仏教研究が敏感な問題だったし、大陸の研究者と会うには香港しかなかった」云々の話からすれば隔世の感があるだろう。エクスカージョンで台湾の寺院を訪問し、台湾の信者さんたちと同じように仏像に対して拝礼する大陸の教授たちを見ていると、筆者は大陸に同じ起源を持つ兩岸仏教と研究が深く結びついているという印象を強く受けた。

しかし、エクスカージョンに同行した台湾人僧侶にそういった話をふってみると「大陸の教授たちの参拝は形式だけ。本当は仏教を尊重していない」という。なぜかと聞くと「彼等の態度を見ればわかる」と言いきった。彼女の答えは最初筆者を戸惑わせたが、二日間のエクスカージョンの中で次第に理解できるようになっていった。

基隆月眉山靈泉寺の訪問では、寺院参観後に座談会が設けられ、住職が寺の歴史について話してくれた。ところが、ひととおり話を聞いた北京の教授は立ち上がり「この寺は福建鼓山湧泉寺の法脈だという。しかし住職は日本へ留学経験があるという。一体、この寺の法脈はどっちなんだ?」と詰問。さらに戦争中に住職が日本へ渡ったことがあるという小冊子の記述をとらえて、「つまり日本に協力したということじゃないのか?」と畳み掛けたのである。隣にいた僧籍にある人は「だから北京の人間は政治的でイヤなんだ。戦争中だし、お坊さんなんだから仕方ないじゃないか。」と吐き捨てるようにつぶやいた。当の住職はといえば、どうしてそんなことを質問されるのか理解できずにとまどっていたのが印象的であり、台湾の教授がやんわりフォローに入ってなんとか別の話題に移れた。

エクスカージョン二日目は台中の玄奘寺を参拝した。玄奘寺には1955年に日本から分骨された玄奘三蔵の遺骨がまつられている。日本にある玄奘の遺骨は、もともと戦争中の南京で日本軍が発見して汪政権に返還し、その後汪政権から武力を背景として譲り受けた

ものである。したがって、玄奘三蔵の遺骨とされる骨は、現在、中国と日本と台湾にあり、非常に政治的な問題もはらんでいる（坂井田 2007；2008）。にもかかわらず、玄奘寺の僧侶たちが大陸に残る遺骨について全く知らないのを聞き、あきれた北京の教授が立ち上がって大陸における玄奘遺骨の現状を紹介した。台湾の教授によるフォローの後、筆者も台湾の教授に促されて、日本にある玄奘の遺骨について説明した。

シンポジウムにおける質疑応答からエクスカージョンまでの数日間、北京の教授の言動を見ていて筆者が実感できたのは、当然ではあるが、中国大陸において政治と宗教研究と寺院運営はかなり密接に結びついているということである。80年代末以降、中国政府の経済開放政策にともなって、かつての中国大陸における信仰の自由＝「信仰しない自由」ははじめて「信仰する自由」の解釈をも成立させた。そして、華僑の投資を呼び込むために寺院の復興を促すものの、依然、宗教活動は宗教施設内に限られ、市井における活動は禁じられている（足羽，2000，p.240）。研究方面でも民族問題を重視する政府が、各大学や研究所での宗教研究を奨励している。

しかしながら、戒厳令以後の台湾の仏教は、政治による制限が極めて少ないといつてよい。北京では一致して当然はずの“政府の方針”と“寺院の運営”そして“宗教研究”が台湾では一々別物として説明され、シンポジウムでの質疑応答から中国仏教会の長老たちとの何気ない会話、そしてエクスカージョンにおける僧侶たちとの座談会等々にいたるまで、北京の教授は自分の常識が否定されることに対して苛立ちを感じているようであった。教授にとって“大陸の一部であるはずなのに、大陸とは大きく異なる台湾社会”。帰国間際、筆者に対し「この小さな島に長くいると息が詰まるんだ」とつぶやいた教授のセリフが印象に残った。

現在、台湾の中国仏教会と中国大陸の中国仏教協会との関係は良好である。今回の60周年記念シンポ開催に先立つ4月、中国仏教会は「尋根之旅」72人の訪中団を組織し、抗日戦争勝利後「復会」第一回全国会員代表大会を開催した南京毘盧寺を訪問したという。さらに2008年の毘盧寺の「開放」10周年記念セレモニーに台湾仏教界を代表して浄良長老が参加し、記念論文集の名誉主編も務めている⁶⁾。

にもかかわらず、今回のシンポジウム準備において何よりの苦勞だったのは大陸の学者招聘であったという。闕氏によれば、当時の民進党政権の高官が些細な発言をただけで、大陸の学者は「出席しない」と言い出し、浄良長老が大陸側の仏教協会と交渉するなどの手をつくしたという。早い時期から準備を進めていたにもかかわらず、最終的に教授たちの出国許可が中央政府から下りたのはシンポ開催の3日ほど前。北京の教授たちはともかく、福建の教授たちはそこからさらに地元の手続を経ねばならず、まさに綱渡りのシンポ

6) 第1回中国近現代仏教学術シンポジウム及び毘盧寺恢復開放10周年記念セレモニーについては拙文『近きありて』第54号（掲載予定）。

ジウム準備であったという。やはり当時の兩岸関係の微妙さが反映していたといえるであろう。

2008年の総統選挙の結果、8年ぶりに国民党政権が誕生した。今後の兩岸仏教の学术交流にどのように変化していくのか、注意深く見守っていきたい。

(さかいだ ゆきこ・大阪教育大学非常勤講師)

【参考文献】

中国仏教会（2007），『中国仏教会復会六十週年学術研究会論文集』 p. 592

中国仏教会公式ウェブサイト <http://www.baroc.com.tw/index.htm>

坂井田夕起子（2007）「1950年代の日華仏教交流再開——玄奘三蔵の遺骨「返還」をめぐる」『現代台湾研究』32号, pp. 46-64

————（2008）「玄奘三蔵はなぜ日本にやって来たのか？—遺骨略奪説とその歴史的含意」西村成雄・田中仁編『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』汲古書院, pp. 277-290

足羽與志子（2000）「中国南部における仏教復興の動態」『現代中国の構造変動』東京大学出版会, pp. 239-274